全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ人・自然・文化

＜発行＞全国草原再生ネットワーク
http://www.sogen-net.jp/

ニュースレター
vol.13
（Jan., 2013）

初冬の日差しに干されるススキのボッチ
乾燥させた後、茅葺きの材料として用いられる（2007 年島根県三瓶山にて）

■新年のあいさつ

（高橋佳孝：全国草原再生ネットワーク会長）

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

日頃より、草原再生ネットワークの活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。本年も一層のご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

昨年 10 月 27 日～29 日には、群馬県みなかみ町において「第 9 回全国草原サミット・シンポジウム」が盛大に開催されました。サミット・シンポにかかわった実行委員会の皆様、本当にご苦労さまでした。今回、草原は流域に住むみんなで守るという「流域コモンズ」の概念が共有されたことは画期的でした。草の新しい利用、草原の経済評価・見える化、観光利用などサミット・シンポの討議内容の濃さはもちろん、開催 3 日間を通じた地元も皆さんのおもてなしの心には大変感激しました。改めて心よりお礼を申し上げます。

その一方で、昨年は悲しいできごともありました。皆さまご存知のとおり、4 月には阿蘇でボランティアの方が野焼きの火に巻き込まれ、お亡くなりになりました。追いうちをかけるように、7 月には北部九州豪雨に見舞われ、阿蘇の皆さんは大変な被害に遭われました。広大な草原も至るところで崩壊し、70 頭もの牛が被害にあったとのことです。草原が使えずに畜産をやめる農家も出ていると聞き及んでいます。しかし、このような逆境にもめげず、一足ずつ復旧・復興への歩みを進めています。野焼き支援ボランティア活動も、熊本県などのサポートなどで安全対策の強化・改善を講じた上で、地元牧野組合からの強い要望に応える形で活動を再開しました。

災害や事故はないにこしたことはありませんが、どんなに用心しても 100 パーセントを回避することの難しさに直面します。今後は、リスクを最小限にとどめるとともに、被害を未然に防ぐための方策、仕組み作りがとても大切だと感じています。自分たちにできることを積み重ねて行くことはもちろん、草原再生ネットワークとしても今後の重要な課題と位置づけ、情報発信したいと思います。皆様からのアイデアや助言をいただきながら、効果的な安全対策を実現するための環境整備を進めていく所存です。

皆様には、本年も相変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げるとともに、明るく希望に満ちた一年となりますことを心よりお祈り申し上げます。

■第 9 回全国草原サミット・シンポジウムの参加報告

「第 9 回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ」を終えて

（木村伸介：群馬県みなかみ町）

述べ 415 名をお迎へし、10 月 27 日から藤原小中学校体育館をメイン会場として開催された全国草原サミット･シンポジウムが 3 日間の日程を終了した。開催までには 2 年の準備期間を費やした。開催日を森林塾が毎年茅刈を始める時期に設定し 10 月 27 日から 29 日の 3 日間と決め、町長を会長とした実行委員会を立ち上げ会場の選定や内容の検討が始まった。初めに開催場所の選定にあたり、当然ホテルや町の施設を使用するものと思い、それを想定した案を実行委員会で示したが、町長の「今回のサミットは、藤原地区で完結する。」の一言でメイン会場が藤原小中学校体育会に懇親会会場が宝台樹スキー場のレストハウスにと手作り感いっぱいのサミットになることが決定した。次に内容の検討だが、これについては、実行委員会の副会長でもある森林塾の清水塾長を中心とした塾のメンバーとサミットの管理運営をお願いした同じく塾事務局でコミニティデザイン代表の浅川氏の下、詳細な行程等検討を行い、全国草原再生ネットワーク高橋佳孝会長の全面的な協力を得て、初日に地元見学会、中日にシンポジウム・

分科会・懇親会、最終日にサミットとスケジュールが決定していった。現地見学会は、茅刈り体験コースと藤原集落見学コースと 2 コースを用意し、シンポジウムでは和歌山大学大学院教授の養父志乃夫氏に基調講演をお願いした。また、4 つの部会を設けた分科会には、それぞれの部会を日本茅葺き文化協会を始め各分野で活躍されている団体にお願いした。

手作りのサミットに決定してから地元に物産係や飲食係等実戦部隊を組織し、懇親会をメインとした 3 日間の飲食を商工会にお願いし、地元の飲食係により提供してもらった。「なるべく地の物を使ってもてなしてやろう」との商工会山田事務局長の言葉通りのすばらしい料理となった。

最終的に 9 首長を始め延べ 415 名の参加者で賑わった 3 日間になったが、締切 1 ヵ月前になってもなかなか参加申込書が届かない。実行委員会の席上で現状を報告し、再度各委員の方々にお願いしお声掛けをしていただいた結果、締切日を待っていたかのように申込書が届いた。会場準備を地元民宿組合、役場職員、商工会職員で行い当日を迎えた。

あっという間の 3 日間だったが、「私たちの村を気に入ってくれましたか」と藤原小中学校の生徒の問いに「気に入った」と答えてくれ、ふるさとを合唱してくれたすべての参加者に感謝します。

第 1 分科会に参加して

（佐久間智子：広島県在住）

第 1 分科会では、「地域の生態系サービスの見える化」をテーマとして、マップづくりについて 3 つの事例が紹介されました。

宮崎県綾町での綾プロジェクトでは、「ふれあい調査」という方法で地域のマップが作られました。「ふれあい調査」では、地域の人が大切にしているものを集めるために、「五感」に残っているものを中心に情報収集が行われました。具体的には、「目に浮かぶ風景」「耳にのこる音」「鼻に思い出す匂い」「肌によみがえる感触」「舌に懐かしい味」の 5 つです。集められた情報にイラストが加えられてマップが出来上がりました。マップができることにより、地域の人は若い世代や外から来た人たちに地域の良さを伝えたいという気持ちになりました。

みなかみ町の AKAYA プロジェクトでは、国有林の生物多様性を守り、利用するためにはどうすればよいかという課題の中で、旧三国街道のマップづくりが行われました。地域の方を交えたワークショップや現地学習会により、旧三国街道の魅力を共有し、その魅力を伝えるモニターツアーが行われました。その後、どのようなマップが良いか改良を加えながら、マップづくりが行われています。

今回のサミットで現地見学会が行われたみなかみ町藤原地区では、草原を保全する活動の中で、森林塾青水が中心となってマップづくりが行われました。このマップづくりでは、地域の人が昔から利用してきた「道」をテーマとして集落と集落を結ぶフットパスマップが作られました。地域の人や中学生と一緒に現地を見て回ったり、地域の人にヒアリングを

行って昔の話を聞いたりする過程の中で、後世に伝えたいものは何かということが分かってきました。

3 つの事例を聞いた後の意見交換では、現在の地図と過去の地図を同じ地図に表すのはどうすればよいか、地図の活用方法が体系立っていないということなど実際にマップづくりを行ったことのある方からの意見がありました。

3 つの事例に共通していたことは、時間をかけてマップづくりを行っているということでした。マップづくりは地域の生態系サービスを「見える化」するだけでなく、マップを作る過程において、地域の人やそれに携わる人たちがつながり、地域の生態系サービスについて共通の認識を持った上で，共に地域づくりを考えることができるということが重要なポイントでした。

マップづくりは地域の生態系サービスを地域づくりに生かすための橋渡しをしてくれる有効な方法であると感じました。

第３分科会「流域コモンズによる生物多様性保全と価値評価」の報告

（文責：三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社　阿部剛志・西田貴明）

第３分科会では、人口減少社会・成熟社会において草地と生物多様性の保全を進めていくために必要となる「流域コモンズ」という考え方、そして流域コモンズが享受している価値の「評価方法（見える化）」にスポットをあてて議論を行いました。

まず、分科会コーディネータを努めた三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング（以下、MURC）より流域コモンズによる草地保全の必要性を説明しました。中長期的に人口減少が進む中で、草地をはじめとして人が手を入れることで豊かさが維持される土地の周辺から住民が相当数いなくなることを推計した結果などを紹介し、草地を持続的に保全していくためには、活動に他地域から人と財が集まる新たな「仕組み」の構築が急務であると提起しました。

この提起に関して会場と意見交換を行いました。千葉県船橋市を拠点に東京湾の保全活動等を展開している NPO 法人ベイプランアソシエイツ代表の大野氏より、アメリカ合衆国・サンフランシスコで取り組まれているチェサピーク湾の再生に向けた多様な主体の協働によるプランニング（50 年計画）の事例を紹介いただき、東京湾とつながるみなかみの草地保全にも「流域コモンズ」として下流住民が参画することの重要性を現場の視点でご指摘いただきました。また、利根川流域の自治体であり、みなかみ町の姉妹都市でもある取手市の職員からは、茨城県で導入されている森林湖沼環境税の例を紹介いただきました。流域コモンズの考え方に沿う取り組みの一つである一方、現状では、課税されている市民は、税金を水源地域の保全活動を維持する意義やそこから得られる恩恵（価値）について十分認識されていないのではないかと懸念が示されました。

また、みなかみでの草地保全活動に参加したことのある東洋大学の学生からは、流域コモンズの必要性は、言葉だけで説明されても理解できず、「体験することが一番」と発言いただきました。

そして、これらの意見交換を踏まえ、言葉だけでは伝わらない価値を定量的に評価（見える化）したり、課税の単価設定の合意形成にも活用できたりする手法として「経済的価値の評価」の意義と、流域コモンズの総意による経済的価値の評価の具体的な方法に関して、MURC より再度説明しました。時間的な制約から、詳細な説明はできませんでしたが、生物多様性国家戦略で国家としても経済的価値の評価を重視していることや、各経済的価値の評価手法の適用すべき場面の整理、そしてその中でも流域コモンズの総意を反映できる「CVM（仮想的市場評価法）」について具体的な評価作業ステップを紹介しました。

以上のプレゼンテーションを踏まえ、会場と最後の意見交換を行いました。草地保全活動の実践者である阿蘇グリーンストックの専務理事山内氏からは、草地保全活動を都市と連携していく上で、経済的価値の評価は非常に重要であるとの意見をいただく一方、経済的価値の評価を都市（受益者）の視点で行うのか、農山漁村（受益者かつ担い手）の視点で行うのかという立場の設定が非常に重要であるとの指摘をいただきました。都市の論理では水源涵養機能など草地が持つ価値を切り出して評価することがわかりやすい一方、農山漁村では経済的価値の評価の結果が地域の雇用や仕事に結びつかなければ評価に意義を見いだすことができないという非常に重要な指摘をいただきました。

経済的価値の評価はもちろん、草地保全活動のすべてを評価できる訳ではありませんが、無関心層に理解や賛同を促したり、地域に雇用をもたらすための資金を集める際の「道具」として適材適所で活用していく重要性を今回の議論で再認識しました。

分科会後に行われたパネルディスカッションでも、草地保全の意義や価値を地元行政に理解してもらいたいがそこに経済的価値の評価を使うことはできないかとの期待や相談も受けました。

第４分科会の報告

（平舘俊太郎：独立行政法人農業環境技術研究所（茨城県つくば市））

第４分科会は、タイトルが「草原と観光（ニューツーリズム）」であり、草原が持つ観光資源としての魅力やこれを活用した地域活性化が主題でした。ニューツーリズムとは、旅行会社などが主導する従来の観光旅行とは異なり、訪問先での人や自然とのふれあいを重視した新しいタイプの旅行のことで、将

来的には環境や自然の保全や地域の活性化を目指すものです。

議論に先立ち、成功事例として裏磐梯と大山蒜山地域でのニューツーリズムが紹介されました。いずれも、その地域が持つ自然環境や歴史文化など固有の魅力を旅行者に伝えるエコツアーとなっており、現在では多くの参加者が集まる人気コースになっているとのことでした。このような成功を収めるためには、自然観察路などツアーコースの整備、テーマ性のある多様なツアープログラムの開発、ガイドの育成、目玉となる特産物の開発など、さまざまな工夫や苦労があったとのことでした。一方、今後解決すべき課題としては、外来生物の蔓延防止、地域の自然の消失防止、宿泊型ツアーの普及による地域経済の活性化、などが挙げられるとのことでした。

質疑応答では、参加者それぞれの立場からさまざまな質問や意見が活発に飛び交いました。たとえば、地域の活性化を請け負っている立場の参加者からは地元住民の方々との関係についての質問が、ツアーを企画する立場の参加者からは魅力的なツアープログラムの開発に関する意見が、旅行者を受け入れる地域住民の立場の参加者からは意外にも身近なところにある地域の魅力の発見についての意見が出されました。分科会のために充てられた約 1 時間半は、ここまででほぼ使い切ってしまったため、ここで会は終了となりました。

個人的には、質疑応答で発言できなかった参加者の意見も気になるところでしたが、その先にある「日本の草原」を舞台にしたニューツーリズムの姿についても議論して欲しかったと思いました。日本の草原は、人の手によって作り出された二次的な自然ですが、数千年の長期間にわたって安定的に維持されてきた結果、その環境に適したさまざまな生物がそこでいのちをつないでいます。これらの生物の中には、こういった伝統的な草原でしかいのちをつなげないものも多いようです。言い換えると、「人間活動」と「日本の草原」と「草原の生物や生物多様性」はどれも強くつながっていると言えます。ニューツーリズムでは、参加者が自ら体験し学ぶ点が大きな魅力ですので、人間活動と密接に関係している日本の草原は格好のニューツーリズムのシーズ（タネ）ではないかと思います。そして、そのシーズからどうやって地域の住民の方々とともに草原の価値や重要性を学んでいくか、またどうやって草原の保全や地域の活性化につなげるか、今後のニューツーリズムの動向に期待したいと思っています。基礎的な研究を行う立場にある私も、草原で学ぶことができる知見をよりわかりやすい形で提供することにより、ニューツーリズムをサポートしたいと思いました。

以上第４分科会は、参加者それぞれがそれぞれの立場で触発された大変刺激的な会だったと思います。

現地見学会に参加して

（森田沙綾香：独立行政法人農業環境技術研究所（茨城県つくば市））

藤原見学コースは、森林塾青水の増井太樹さんとみなかみ町の林親男さんの案内で、上ノ原草原の散策からスタートしました。散策は、茅場から出発し、ミズナラの紅葉が見ごろの木馬道（きんまみち：木材を搬出するために利用された道）を通って集落の水源である十郎太沢まで足を伸ばし、再び茅場に戻るというコースでした。その間に、茅場として盛んであった戦前の上ノ原草原と住民の関わりや、茅場が衰退した後に森林塾青水によって茅場が再生および利用されるに至るまでの経緯についてお聞きしました。私がこの上ノ原散策で最も印象として残ったのは、林さんが時折話す草原との関わ

り、たとえば、ハバヤマボクチの葉は、たばこを巻く葉として利用されていたといった小話と、クロモジが良い香りだと経験的に知っている子供たちが、クロモジを集めるために上ノ原草原で遊んでいたことでした。女の子から頂いたクロモジ、帰宅して 2 週間経ってもよい香がしていました。

散策後は、みなかみ町の方々が作ってくれた美味しいおやき、お茶菓子とお抹茶のおもてなしを受け、バスにて藤原ダムへと移動しました。そのバスの移動中でも林さんは周辺集落の思い出話や担い手不足、高齢化など藤原集落が抱える問題を語ってくれました。バスから見た藤原地区は、2～3 軒ぐらいの小さい集落が点在し、休耕田は、私たちが平地であたりまえに見るセイタカアワダチソウの群生ではなく、ススキが優占した懐かしい里山の風景そのものでした。

バスで移動後、林さんと藤原ダム管理事務所の方それぞれから、藤原ダムの説明を受けました。次に、再びバスで移動し、諏訪神社の舞殿と雲越家住宅を見学しました。これらの屋根の茅葺きには、上ノ原のススキが利用されています。興味深いことは、単に茅を刈り取って草原を維持すること、そして刈り取った茅を有効利用するということだけに止まらず、刈り取る労力に財を投入して地域に資本が還元されるようにしているという点です。刈り取りの労力の多くは、ボランティアを利用するのが通常だと思います。藤原集落の方の生活を支えるという規模までにはないにせよ、森林塾青水とみなかみ町のこの取り組みに、私は感心しました。これら茅の利用の場面を最後に、現地見学会藤原見学コースは終了しました。

藤原見学コースに参加したことは、生物多様性という言葉の深い意味を考えさせられ、人も生物多様性の一部で、人の生活を守ることもまた保全につながるのだと教わりました。

◇コラム◇

島根県隠岐の島の古典相撲を題材に、家族の新生と船出を描き出す話題の映画「渾身」が封切られた。離島であるからこそ守られ、今でも生活と結びついている隠岐相撲。島根県内映画館では全国に先駆けて 1 月 5 日からのお目見えだった。

昨年の草原サミット･シンポ in みなかみでの養父忍乃夫先生の基調講演の中で紹介があった隠岐の島の話とあって早速見に行った。最近にないほどの観客の入りでびっくりしたが、ストーリーが進むにつれ、ほとんどの人が皆ハンカチで涙を拭っていることにもっとびっくり。そういう私も例外ではなかったのだが。脚本がいいのか、役者がうまいのか、相撲の話でこんなに泣けるなんて・・・。

風景がいい。青い海に浮かぶ島の断崖絶壁の上に広がる草原の緑と黒牛達の色のコントラスト。隠岐の島のこの美しい風景がひと際目と心に沁み、自然と涙が頬を伝うのだ。

家族の新生の話で涙するもいい。相撲で感動するもいい。この映画を見たらきっとあの牛たちが作った草原を見に隠岐に行きたくなるに違いない。是非、皆さんにもお勧めしたい。

（高橋泰子：ネットワーク事務局）

■「全国草原リレー」（第３回）

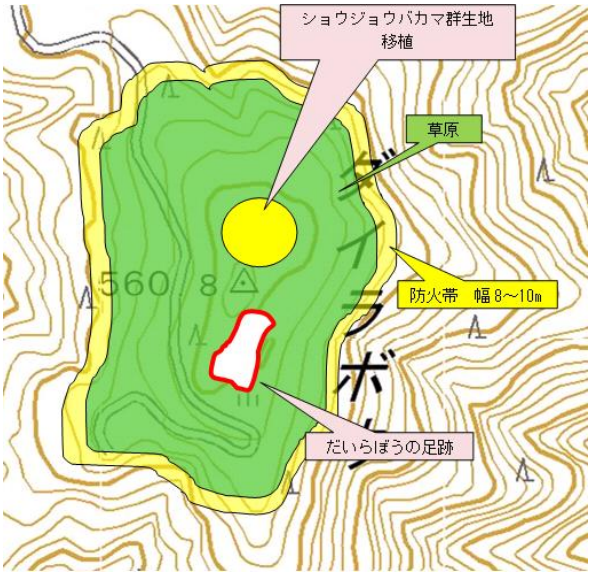
ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第２回は、理事でもある塩坂氏らに、静岡市での取り組みを紹介して頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

■市街地から見える山頂で山焼きの復活を■

（塩坂邦雄・池谷龍生）

静岡市街地からほど近いダイラボウ（標高561m）は、かつては茅場として周辺地域の生活に密接に関わっていましたが、戦後、植林が進み、一部林業関係者以外には地元との関係は希薄になっていました。

しかし、眺望のよい独立峰ということでハイキング客なども多く、パラグライダーなどのスカイスポーツも盛んです。新東名の開通に伴い交通アクセスも格段に向上したため、ここに草原を復元することが、周辺地区の地域振興の起爆剤になるものと考え、「ダイラボウ草原復原計画」を進めています。



ダイラボウ草原復原計画模式図

ダイラボウ山頂

60 年前のダイラボウ

計画としてはまず、草原化する範囲を決定し、その外周に一定幅の防火帯を設定します。その範囲の樹木を伐採するとともに、初年度はスギ・ヒノキなどの植林部分についても事前に伐採します。なお、山頂部のスギ・ヒノキ林にはショウジョウバカマが生育していますが、これらはあらかじめ移植します。

草原を維持するためには、定期的な山焼きが必要となります。山焼きは、例年草の枯れる２月から３月に実施するものとします。静岡市街地からも眺められるダイラボウ山頂の山焼きは、夏の安倍川花火大会、秋の大道芸ワールドカップにも匹敵する、早春の風物詩となるものと期待されます。

さらに、新東名静岡サービスエリアでは、日本で唯一「パラグライダーのできるサービスエリア」をめざし、ダイラボウからのタンデムフライトやふわっと体験など、初心者にもパラグライダーを楽しんでもらえる環境作りも進めており、山焼きとの相乗効果も期待されます。

なお、「ダイラボウ」という地名は、巨人「ダイダラボッチ（大らぼう）」が琵琶湖の土を掘って富士山を造るときに足跡を残したという伝説から名付けられました。科学的には琵琶湖の土は

堆積岩、富士山は火山岩なので、そんなことはあり得ませんが、瀬戸川層群の砂岩・泥岩互層からなるダイラボウ山頂には、断層活動によって巨人の足跡のような地形が形成されています。これがこの伝説の元となったのでしょう。

この計画は現在、緒に就いたばかりで、実現にはまだまだ多くのハードルをクリアしなければなりませんが、地元の地域振興会や新東名運営会社の NEXCO 中日本などの賛同も得て企画書を作成、各方面に根回しを始めています。ダイラボウの山焼きが実現した暁には、是非みなさんも見学にいらしてください。

パラ・タンデムフライト

■草原をめぐる動き（2013 年 1 月～4 月）

1/27 野焼きがタチスミレを救う（場所：茨城県坂東市菅生沼、連絡先：茨城県自然博物館）

2/2 第 12 回乙女高原フォーラム（場所：山梨市民会館、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

2/9 軌跡の原っぱ～そうふけっぱらのキツネを守ろう！（場所：千葉ニュータウンイオンショッピングセンター3Ｆ、連絡先：亀成川を愛する会）

2/9-10 野焼き・輪地切り支援ボランティア初心者研修（第 1 回）（場所：熊本県阿蘇市内、連絡先：公益法人阿蘇グリーンストック）
http://www.asogreenstock.com/

2/16-17 同上（第 2 回）

2/17 秋吉台山焼き（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：美祢市役所）
同日の夜には、「秋吉台野火の祭典」もあり

3/10 茅葺き体験教室（場所：世田谷区次大夫掘公園民家園、連絡先：世田谷区教育委員会民家園係）

3/13 秋吉台追加の山焼き（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局（秋吉台エコ・ミュージアム））

3/23 三瓶山西の原火入れ（場所：島根県大田市三瓶山、連絡先：大田市役所）

4 月上旬 塩塚高原山焼き（場所：愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先：四国中央市役所・三好市役所）

4 月上旬 深入山山焼きまつり（場所：広島県山県郡安芸太田町、連絡先：安芸太田町観光協会）

4/13 雲月山山焼き（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）

4/20 千町原山焼き（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）

4/27-29 「茅葺き体験会」カヤマル 2013@美山砂木（場所：京都府南丹市美山町高野地区 砂木集落地蔵堂）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク　ニュースレター　vol.13　2013 年 1 月号

全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
NPO 法人緑と水の連絡会議内　Tel. 0854-82-2727　Fax. 0854-84-0262

【編集後記】新年あけましておめでとうございます。事務局のある大田市の三瓶山は、今年国立公園編入から 50 周年を迎えます。国立公園への指定要件のひとつが、山麓に広がる牧歌的な草原景観でした。草原が風致的にも非常に価値をもっていた、そんなことの証明といえます。50 周年にあわせて、草原の価値を伝え直す機会にしたいと思っています。